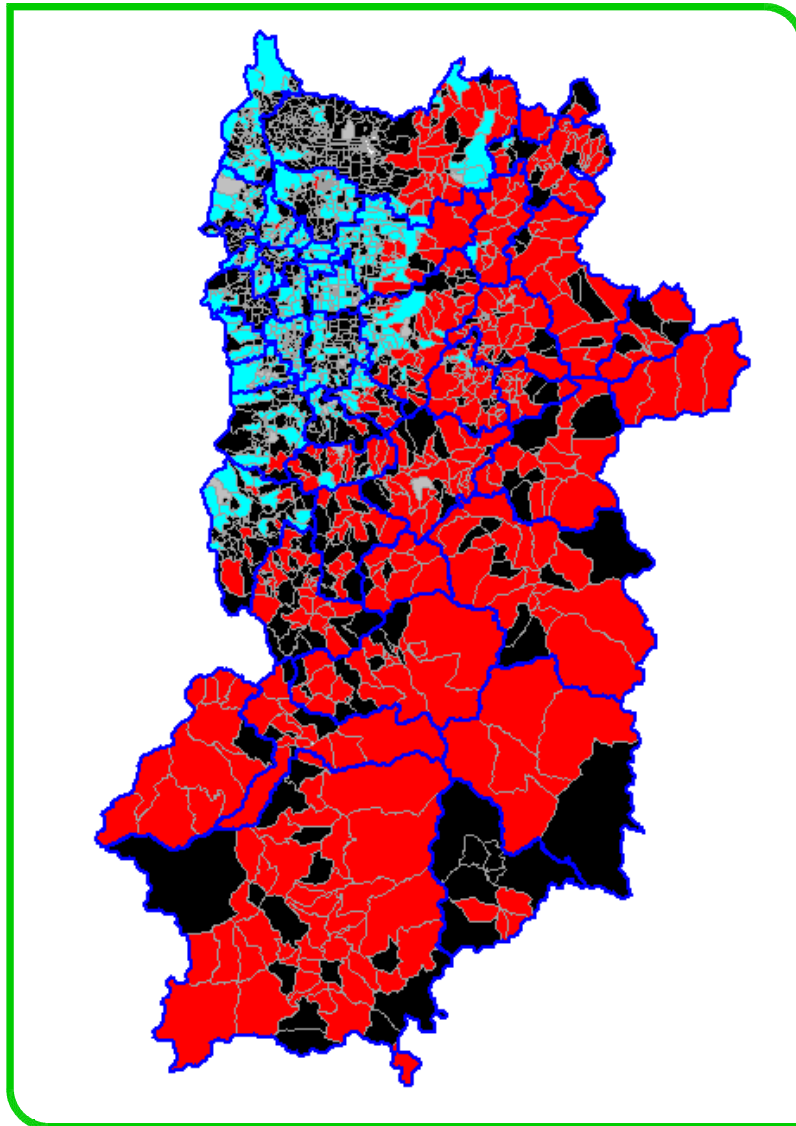


# 農業・林業集落アンケート調査によるシカの生息状況・被害状況(平成22年度)

## 1. 平成22年度農業・林業集落アンケート調査によるシカの分布



左図は平成22年度の農林業集落アンケート調査による、シカの分布である。

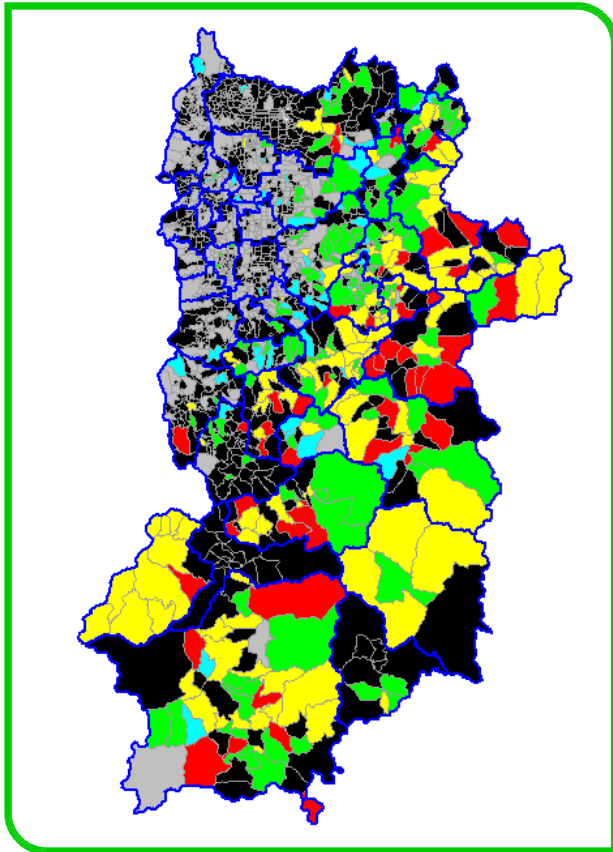
農業集落、林業集落の両方、またはいずれかでシカが「いる」と回答があった場合に「分布している」とした。回収無しには既に人が住んでいない集落も含まれている。

県北西部の奈良盆地、生駒・葛城・金剛山系を除く県北東部から県東部・南部にかけて広い地域から、シカが「いる」との回答があった。

平成22年度	
■ いる	412集落
■ いない	364集落
■ 回答無し	26集落
■ 回収無し	1006集落
計	1808集落

凡例 図中 青線 市町村界 市町村界内側の線 大字・地区界  
なお、この市町村界、大字・地区界の凡例は次項以降の図も同様である

## 2. シカの農業被害の大きさ



左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害の大きさの意識調査の結果である。

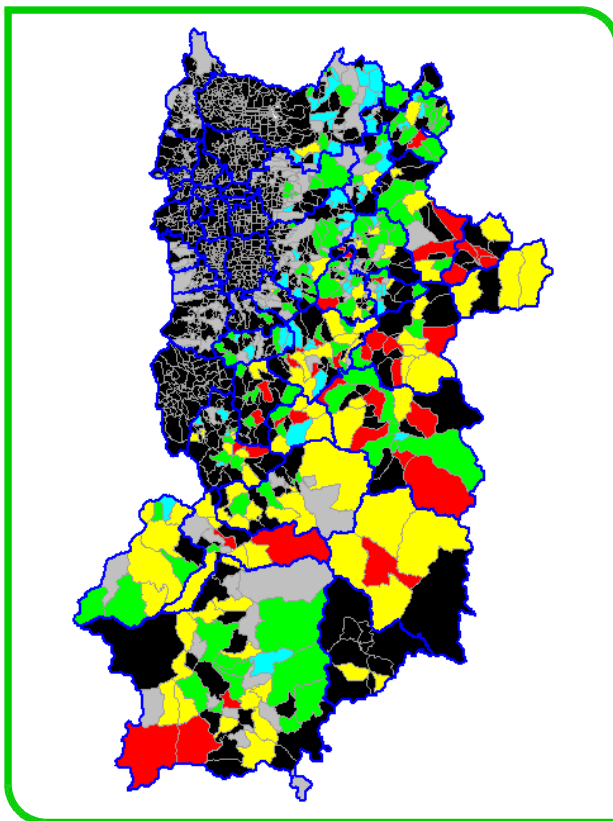
シカが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった381集落の内訳は下記の通りである。

被害が「大きい」又は「深刻」と回答しているものが、併せて約45%あり、シカによる農業被害意識は大きいことがわかる。また、「軽微」という回答を併せると、被害認識は約85%となり、多くの地域でシカによる農業被害が認識されてる。

・平成22年度	
ほとんど無い	58集落 (15.2%)
軽微	153集落 (40.2%)
大きい(生産量の30%未満)	120集落 (31.5%)
深刻(生産量の30%以上)	50集落 (13.1%)
回答数	381集落

・参考)平成21年度	
ほとんど無い	60集落 (16.6%)
軽微	147集落 (40.7%)
大きい(生産量の30%未満)	104集落 (28.8%)
深刻(生産量の30%以上)	50集落 (13.9%)
回答数	361集落

## 3. シカの林業被害の大きさ



左図は平成22年度の林業集落アンケートによる、林業被害の大きさの意識調査の結果である。

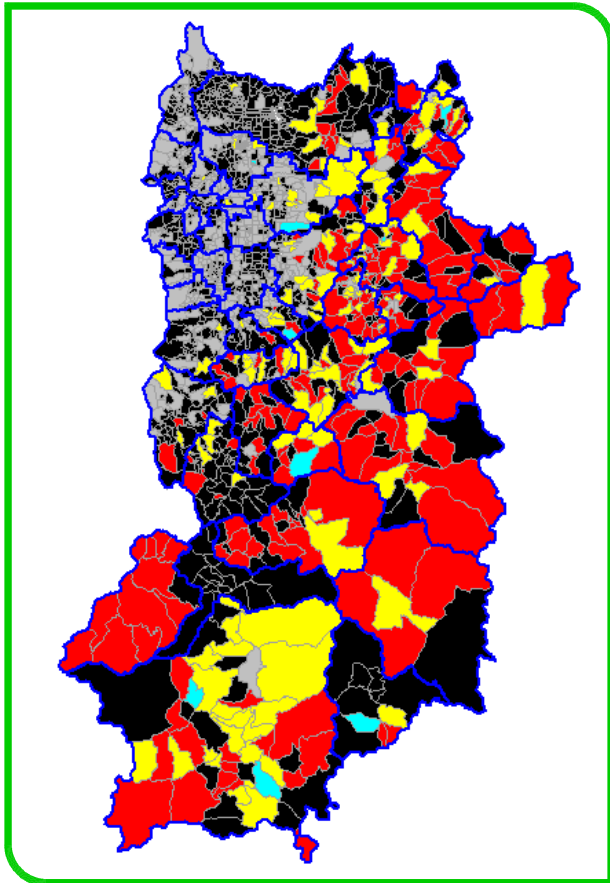
シカが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった302集落の内訳は下記の通りである。

被害が「大きい」又は「深刻」と回答しているものが、併せて約41%あり、シカによる林業被害意識は大きいことがわかる。また、「軽微」という回答をな併せると、被害認識は80%近くに達し、多くの地域でシカによる林業被害が認識されている。

・平成22年度	
ほとんど無い	62集落 (20.5%)
軽微	117集落 (38.7%)
大きい(生産量の30%未満)	84集落 (27.8%)
深刻(生産量の30%以上)	39集落 (12.9%)
回答数	302集落

・参考)平成21年度	
ほとんど無い	51集落 (18.1%)
軽微	103集落 (36.5%)
大きい(生産量の30%未満)	83集落 (29.4%)
深刻(生産量の30%以上)	45集落 (16.0%)
回答数	282集落

#### 4. シカの農業被害の増減



左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害の大きさの意識調査の結果である。

シカが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった364集落の内訳は下記の通りである。

被害が前年度と比べて、「増えた」と回答しているものが、約58%にのぼる一方、「減った」と回答しているものは僅か2.8%と、多くの地域で被害は減少していないことがわかる。

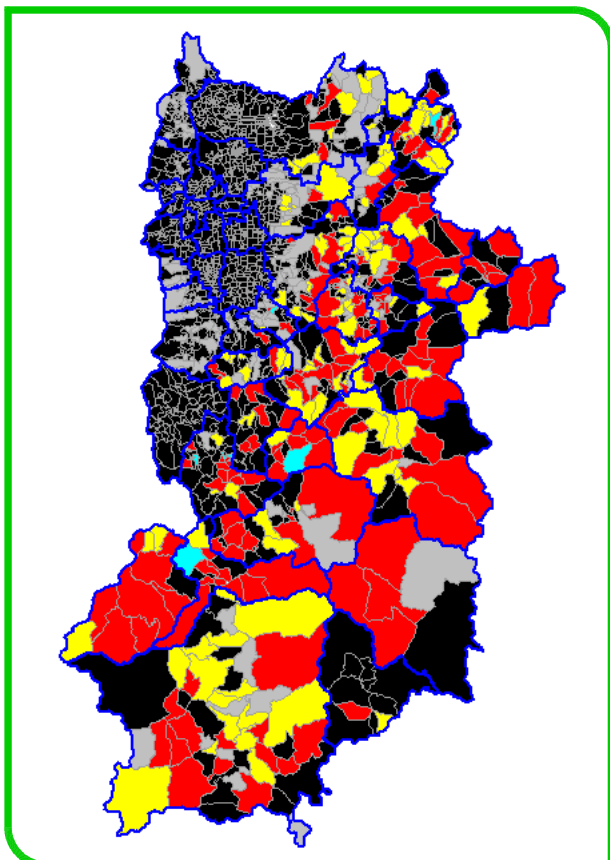
平成22年度

■ 増えた	210集落(57.7%)
■ 変わらない	144集落(39.6%)
■ 減った	10集落( 2.7%)
回答数	364集落

参考) 平成21年度

■ 増えた	215集落(61.4%)
■ 変わらない	130集落(37.1%)
■ 減った	5集落( 1.4%)
回答数	350集落

#### 5. シカの林業被害の増減



左図は平成22年度の林業集落アンケートによる、林業被害の大きさの意識調査の結果である。

シカが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった291集落の内訳は下記の通りである。

被害が前年度と比べて、「増えた」と回答しているものが、57%となり、「減った」と回答しているものは2.1%と、農業被害と同様に多くの地域で被害が減少していないことがわかる。

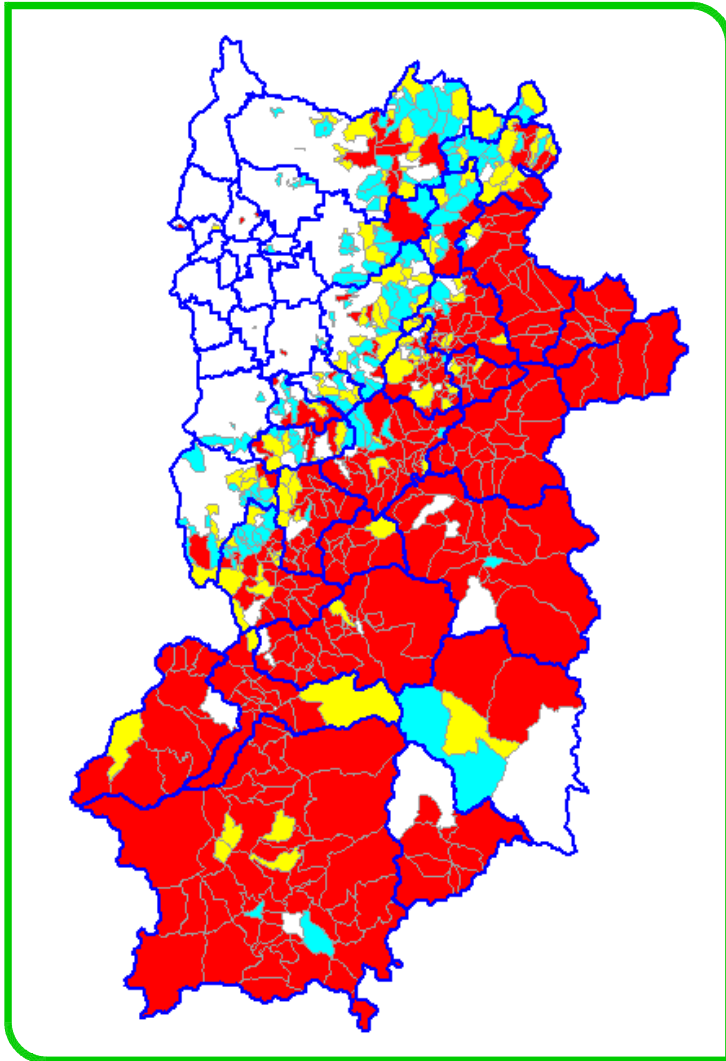
平成22年度

■ 増えた	167集落(57.2%)
■ 変わらない	119集落(40.7%)
■ 減った	6集落( 2.1%)
回答数	292集落

参考) 平成21年度

■ 増えた	189集落(67.0%)
■ 変わらない	90集落(31.9%)
■ 減った	3集落( 1.1%)
回答数	282集落

## 6. シカの農地・集落周辺への出没動向(平成19~22年度の4年間)



左図はシカの農地・集落周辺への出没の調査を開始した平成19年から平成22年までの4年間の動向である。

毎年集落毎に農地・集落周辺へのシカの出没を1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの区分で回答を得ている。

そして、1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの回答を、「よく見る」を+1、「たまに見る」を±0、「あまり見ない」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまりよく見るが多い場合)は赤色で、0になる場合(つまりたまに見るになる場合)は黄色で、-1以下の場合(つまりあまり見ないが多い場合)は青色で各集落を色つけた。4年間で1度でも回答があった場合を集計している。

空白は調査した4年間、シカがいない、無回答、集落に人が住んでいないのいずれかである。

シカの農地・集落周辺への出没は、県北部奈良市の一部、県東部の宇陀地域から県南部の吉野郡にかけて多くなっている。近年分布が拡大した県北部や奈良盆地周辺地域では出没はまだ少ないようである。

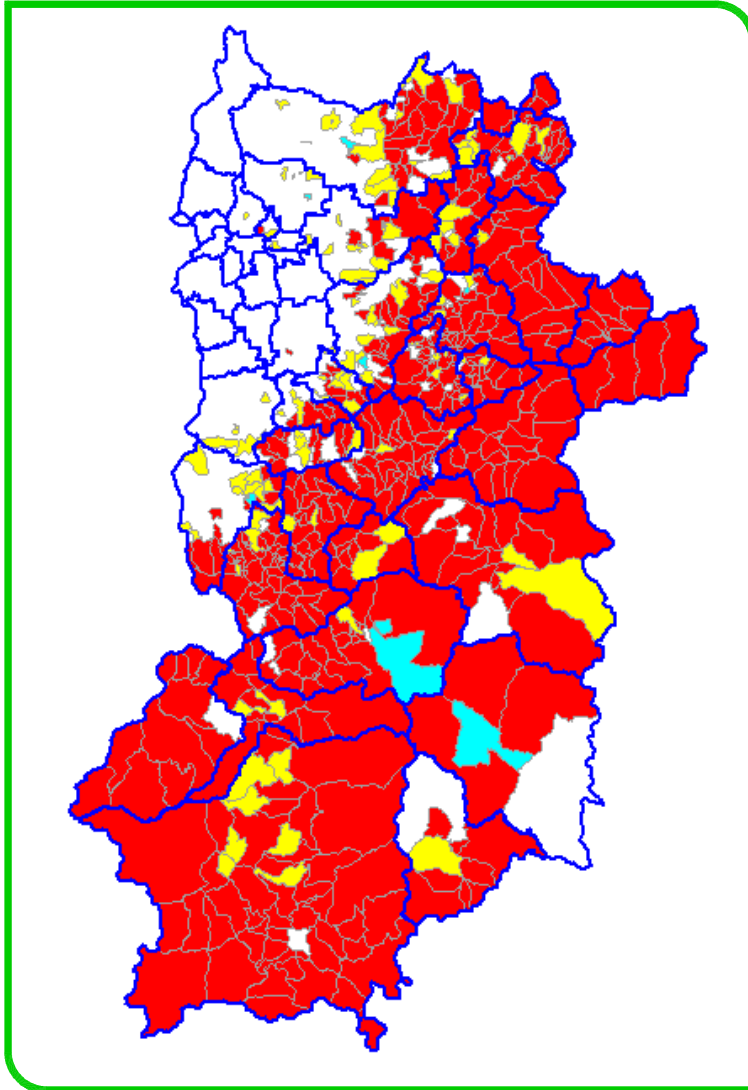
### 平成22年度までの4年間

よく見る	332集落(55.3%)
たまに見る	128集落(21.3%)
あまり見ない	140集落(23.4%)
回答数	600集落

### 参考)平成21年までの3年間

よく見る	307集落(55.4%)
たまに見る	130集落(23.5%)
あまり見ない	117集落(21.1%)
回答数	554集落

## 7. シカの農業被害意識の動向(平成19～22年度の4年間)



左図はシカによる農業被害の意識の4年間の動向である。

毎年集落毎に農業被害を前年度より1. 増えた、2. 変わらない、3. 減ったの区分で回答を得ている。

そして、「増えた」を+1、「変わらない」を±0、「減った」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまり増えている場合)は赤色で、0になる場合(つまり変わらない場合)は黄色で、-1以下の場合(つまり減った場合)は青色で各集落を色づけした。4年間で1度でも回答があった場合を集計している。

空白は調査した4年間、シカがない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

シカによる農業被害の意識は、ごく一部では減っているものの、県北東部や宇陀地域から県南部の吉野郡にかけての広範囲で増えており、また、農地・集落周辺への出没動向では「あまり見ない」となった県北部や奈良盆地周辺地域においても、「増えた」が多くなっている。そして回答を得た集落のうち約80%が増えたとなっていた。

なお、被害動向は昨年度までとほとんど変化は無かった。このことから、依然シカの農業被害は減っていないことがわかる。

平成22年度までの4年間

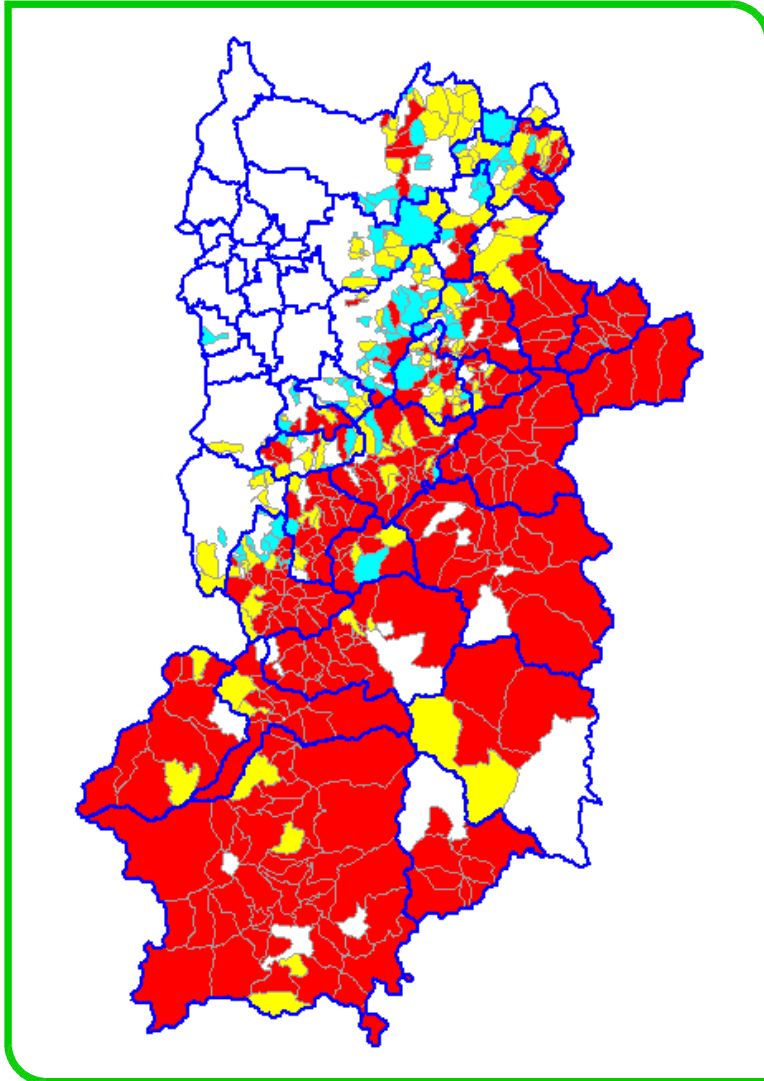
■ 増えた	468集落(79.3%)
■ 変わらない	115集落(19.5%)
■ 減った	7集落(1.2%)
回答数	590集落

参考)平成21年度までの3年間

■ 増えた	437集落(81.2%)
■ 変わらない	95集落(17.7%)
■ 減った	6集落(1.1%)
回答数	538集落



## 8. シカの山林・奥地森林での出沒動向(平成19～22年度の4年間)



左図はシカの山林・奥地森林での出沒の4年間の動向である。

毎年集落毎に山林・奥地森林でのシカの出沒を1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの区分で回答を得ている。そして、1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの回答を、「よく見る」を+1、「たまに見る」を±0、「あまり見ない」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまりよく見るが多い場合)は赤色で、0になる場合(つまりたまに見るになる場合)は黄色で、-1以下の場合(つまりあまり見ないが多い場合)は青色で各集落を色つけた。4年間で1度でも回答があった場合を集計している。

空白は調査した4年間、シカがいない、無回答、集落に人が住んでいないのいずれかである。

シカの山林・奥地森林での出沒は、農地・集落周辺での出沒と同様に、県北部奈良市の一部、県東部の宇陀地域から県南部の吉野郡にかけて多くなっている。近年分布が拡大した県北部や奈良盆地周辺地域では出沒はまだ少ないようである。

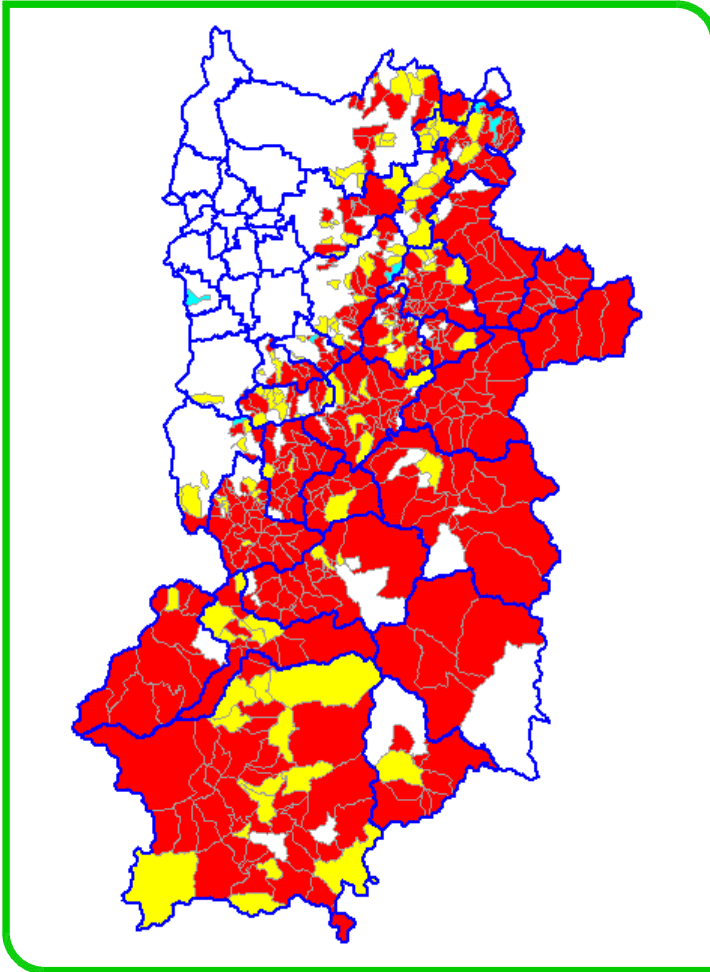
平成22年度までの4年間

よく見る	287集落(57.7%)
たまに見る	126集落(25.4%)
あまり見ない	84集落(16.9%)
回答数	497集落

参考)平成21年度までの3年間

よく見る	263集落(57.5%)
たまに見る	122集落(26.7%)
あまり見ない	72集落(15.8%)
回答数	457集落

## 9. シカの林業被害意識の動向(平成19～22年度の4年間)



左図はシカによる林業被害の意識の4年間の動向である。

毎年集落毎に林業被害を前年度より1. 増えた、2. 変わらない、3. 減ったの区分で回答を得ている。そして、「増えた」を+1、「変わらない」を±0、「減った」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、プラスになる場合(つまり増えている場合)は赤色で、0になる場合(つまり変わらない場合)は黄色で、マイナスになる場合(つまり減った場合)は青色で各集落を色つけた。4年間で1度でも回答があった場合を集計している。

空白は調査した4年間、シカがいない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

シカによる林業被害の意識は、ごく一部では減っているものの、概ね農業被害と同様に、県北東部や宇陀地域から県南部の吉野郡にかけての広範囲で増えており、また、農地・集落周辺への出没動向では「あまり見ない」となった県北部や奈良盆地周辺地域においても、「増えた」が多くなっている。そして回答を得た集落のうち、約75%が増えたとなっており、依然シカの被害は減っていないことが判る。

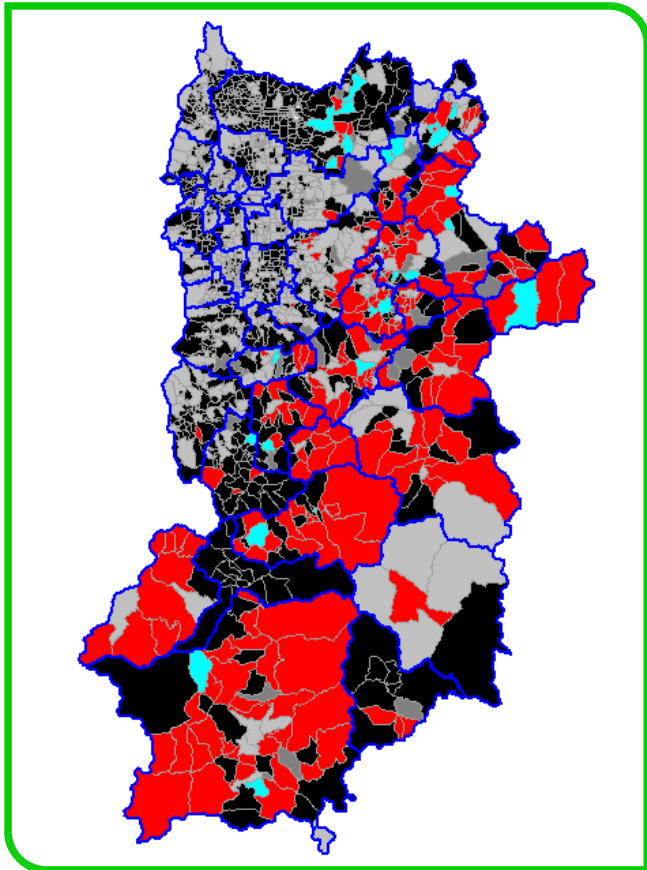
平成22年度までの4年間

■ 増えた	373集落 (74.7%)
■ 変わらない	120集落 (24.1%)
■ 減った	6集落 ( 1.2%)
回答数	499集落

参考)平成21年度までの3年間

■ 増えた	343集落 (74.7%)
■ 変わらない	109集落 (23.7%)
■ 減った	7集落 ( 1.5%)
回答数	459集落

## 10. シカの被害対策 侵入防止柵(防護柵)の効果(農業)

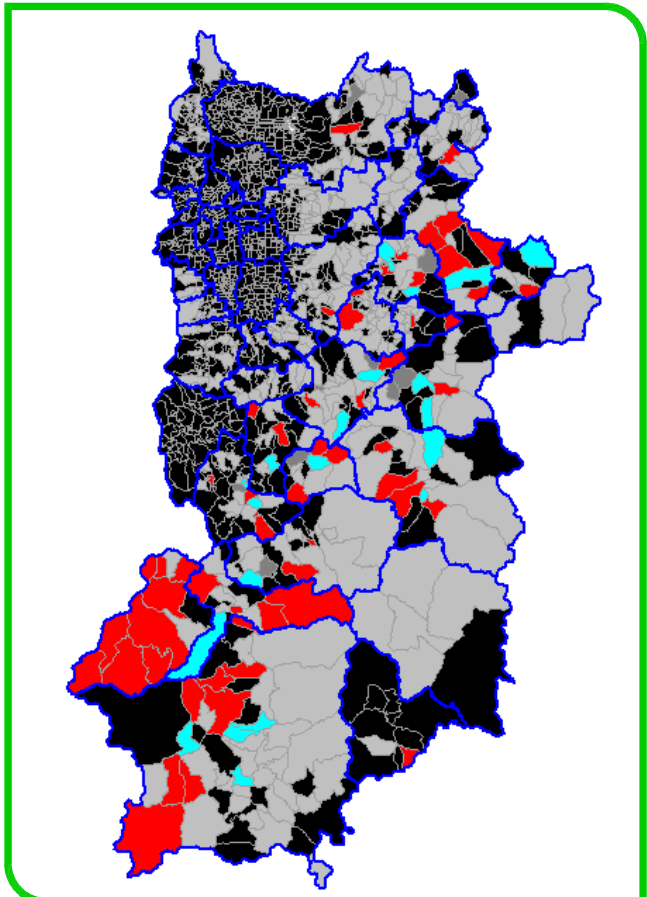


左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、シカ侵入防止柵(防護柵)の効果の意識調査の結果である。

回答のうち約88%が効果があったとしており、侵入防止柵を設置することによる被害防止効果は、非常に高いことがわかる。

■効果があった	204集落(87.9%)
■効果がなかった	28集落(12.1%)
回答数	232集落

## 11. シカの被害対策 侵入防止柵(防護柵)の効果(林業)



左図は平成22年度の林業集落アンケートによる、林業被害対策の、シカ侵入防止柵(防護柵)の効果の意識調査の結果である。

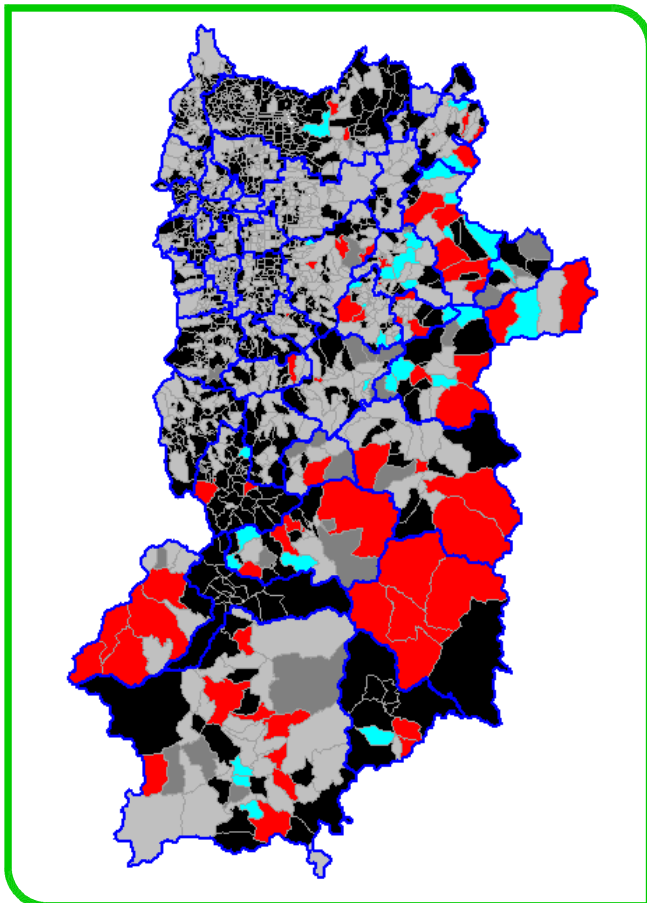
回答のうち約73%が効果があったとしており、侵入防止柵を設置することによる被害防止効果は、高いことがわかる。

■効果があった	57集落(73.1%)
■効果がなかった	21集落(26.9%)
回答数	78集落

なお、農業に比べて、効果があったとの回答がやや少なかった。これは、農業は居住地近くで営まれることが多く、人目にふれやすいため、その効果も目につきやすいこと。侵入防止柵の効果을最大限發揮させるためには見回り・メンテナンスによる破損の防止が重要であるが、山林・奥地森林で頻繁に見回りを実施できないため、破損が多く生じ、シカの侵入を許すことが農地よりも多いためと考えられる。



## 12. シカの被害対策 有害捕獲の効果(農業)

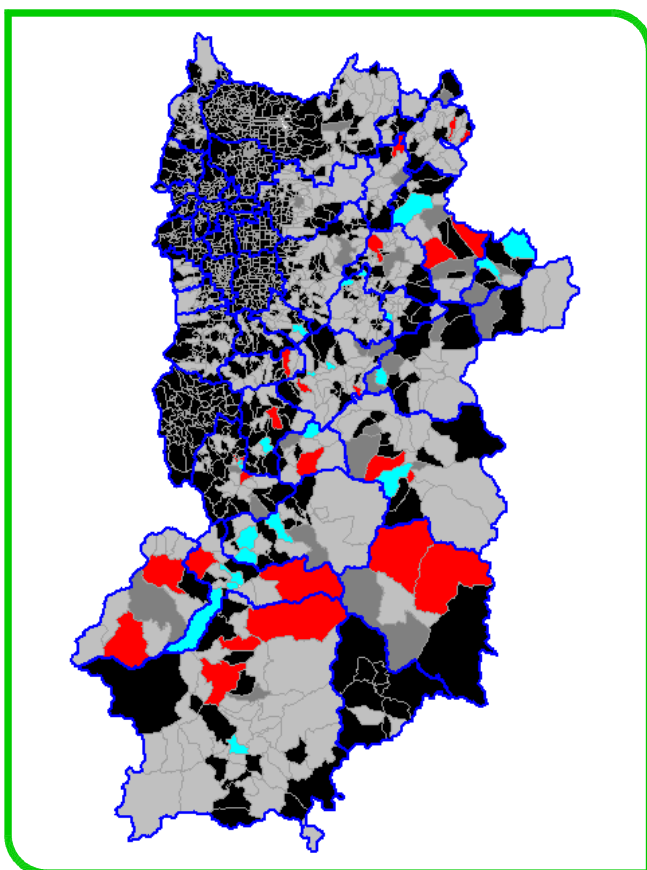


左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、有害捕獲を実施した効果の意識調査の結果である。

回答のうち約66%が効果があったとしており、有害捕獲の効果は高いことがわかる。

■ 効果があった	60集落(65.9%)
■ 効果がなかった	31集落(34.1%)
回答数	91集落

## 13. シカの被害対策 有害捕獲の効果(林業)



左図は平成22年度の林業集落アンケートによる、農業被害対策の、有害捕獲を実施した効果の意識調査の結果である。

回答の約半数が効果があったとしていた。

■ 効果があった	24集落(53.3%)
■ 効果がなかった	21集落(46.7%)
回答数	45集落

農業に比べて、効果があったという回答は少なかった。これは、農地で有害捕獲を実施した場合、追い払い効果もあるため、出没しなくなった場合など人目にその効果は人目につきやすいが、山林では追い払い効果も低く、効果があっても非常に目につきにくいためである。

有害捕獲は、狩猟と併せて、生息数を低減させることで、被害も低減させようとするものである。生息数を低減させるために必要な捕獲数に達しない場合には、その効果が現れにくい。従って被害を低減させるためには更なる捕獲数の増大が必要である。

なお、侵入防止柵等の被害対策と組み合わせることで、より効果的に被害を低減させられるため、両者は併用しながら実施しなければならない。